

## 「ケアリング」における自己の問題 — 職業と労働のはざままで

吉川 孝

(2010年9月27日受付, 2010年12月13日受理)

## The Problem of the Self in Caring—Between Vocation and Labor

Takashi YOSHIKAWA

(Received: September 27, 2010, Accepted: December 13, 2010)

## 要 旨

ケアリングは、誰かを大切と見なすこと、誰かに関心をもつことであり、他者への志向をもっている。そのため、ケアリングが論じられるときには、しばしば、愛、共感、同感、献身などの意識や感情と関係づけられるように思われる。

しかしながら、そのような志向は、ケアリング関係という具体的で全体的な現象の片面的な契機にすぎない。われわれが誰かをケアし、誰かを大切であると見なすときには、われわれは、自己とケアする相手とを同一化しているので、同時にわれわれ自身をもケアしている。われわれが誰かをケアすることは、相手をわれわれにとって大切と見なすことであり、相手がわれわれにとって大切ということである。したがって、ケアする者というのは、みずからによってケアされる者でもある。

興味深いことだが、ケアの哲学（ハイデガー、フッサール、メイヤーロフ、ノディングス、フランクフェルトなど）は、共通して、ケアリングにおけるこうした自己志向の契機を指摘している。この論文は、哲学的観点からケアにおける自己の問題を扱うことになる。そうすることによって、ケアリングはわれわれがみずからを捧げる職業・天職という意味をもっており、ケアリングによる自己実現はわれわれに人格的統一や統合を与えることが理解できる。こうした哲学的アプローチの可能性と限界は、社会心理学的アプローチと比較することで明らかになる。前者がケアリングを職業と見なすのに対して、後者はそれが感情労働という特殊な労働であり、自己の「燃え尽き」の危険性をはらむことを、印象的な仕方でも明らかにしている。

キーワード：哲学、倫理学、ケア、自己、倫理、感情、職業、労働

## Abstract

Caring is to be concerned with or regard someone as important to ourselves, and it has an intention toward others. Therefore, when it is discussed, it often seems to be related to feelings or emotions like love, sympathy, empathy, and devotion.

However, such an intention is only the one-sided element in the concrete and total phenomenon of the caring relationship. When we regard someone as important to ourselves, simultaneously we care for ourselves too, because we identify ourselves with the person we care for. That we care for or regard someone as important to us means that their life matters to us. Accordingly, the person who cares for someone is also the person who is cared for by himself.

It is interesting that the philosophy of caring (M. Heidegger, E. Husserl, M. Mayeroff, N. Noddings, H. Furankfurt, P. Benner) points out the element of self-intention in common. This paper will deal with the problem of the self in caring from philosophical perspectives. This attempt will enable us to understand that caring means the vocation (or calling) to which we whole-heartedly devote ourselves and that self-realization as a vocation gives us personal identity or integrity. Then, the possibilities and limits of the philosophical approach will be clarified by being contrasted with the sociopsychological one (especially Hochschild's). While the former takes caring as vocation, the latter leaves the impression that it is a particular kind of labor, namely emotional labor, and includes the danger that the self will burn out.

Key words: Philosophy, Ethics, Caring, Self, Emotion, Vocation, Labor

## はじめに

ケアリングは、看護、介護、教育などの分野において注目される概念であるが、それだけではなく、哲学においても重要なトピックになっている。医療分野において、自然科学を模範とする近代医学へ批判が向けられるとき、「キュア」に限定されることのない「ケア」の役割が強調されてきた。さらには、もともと発達心理学の分野において生じた、コールバーグとギリガンの論争は、「正義」とは異なる規範形成の原理として「ケア」の可能性を照射している<sup>1</sup>。以後、この論争は、発達心理学にとどまることなく、倫理学や社会哲学にまで影響を及ぼしている。ケアをめぐるこうした論議はいずれも、人間の生き方や在り方そのものにかかわるため、哲学の問題にも通じている。

ケアリングとは、誰かを大切であると見なす (regard someone as important) こと、誰かに関心をもつ (be concerned with someone) ことである。こうしたケアリングが論じられるときには、しばしば、愛、共感、同感、献身などの意識と関係づけられることからわかるように、それはいわば他者への志向をもっている。しかしながら、そのような志向は、ケアリング関係という具体的な現象の一つの契機にすぎない。むしろ、他者を大切なものと見なすことは、他者がわれわれに大切である (matter to us) ということであり、ここには自己への方向性が含まれている。いうなれば、他者へのケアリングのなかには、ケアする自己へのケアリングが働いており、この契機を見落としては、その具体的現象を視野に納めることはできない。興味深いことに、M.ハイデガー、E.フッサール、M.メイヤロフ、N.ノディングス、P.ベナー、H.G.フランクファートなどの哲学的考察（以下、ケアの哲学）は、共通して、ケアするひとの自己にも焦点をあてている。

これらの考察を参考にしながら、以下では、ケアリングにおいて自己がどのように働いているのかを明らかにしてみたい。また、ケアする自己への哲学的アプローチの特徴を明らかにしたうえで、その問題点を検討してみたい。論述は次のように進むだろう。1. ケアの哲学を概観しながら、ケアリングにおける自己形成の契機を確認する。2. ケアするひとの自己形成を「職業」と特徴づける。3. 感情労働論が示す「労働」における「自己疎外」の対比のなかで、職業としての自己形成の可能性と限界を検討する。

### 1. ケアリングにおける自己形成

ここでは、ケアするひとの自己という観点から、ケアリングについての哲学的アプローチのいくつかを概観してみたい。ケアの哲学においては、「他者志向」の側面を明らかにしたものも多く、それらを検討することも重要な課題となるだろう<sup>2</sup>。しかし、ケアの哲学の成果の一つは、「自己志向（自己へのケアリング）」に対する解明の豊かさにある。ケアリングが基本的には他者への志向であるにしても、そこには自己への志向がむすびついている。ハイデガー、メイヤロフ、ノディングスの三者をとりあげ、それぞれのケア概念にひそむ自己志向を確認してみたい。

#### 1. 1 ハイデガー

現代哲学においてケア論の古典とされるハイデガーの『存在と時間』（1927年）は、現存在（人間）の存在論的分析というかたちで、ケアする存在としての人間についての豊かな洞察を提供している。ハイデガーによれば、現存在の存在そのものが「気づかい・ケア (Sorge)」であり、ケアリングは「存在論的構

本稿は、2010年7月17日に、第5回ケアの現象学研究會（科研プロジェクト「ケアの現象学の基礎と展開」（代表：東京大学・榎原哲也）・高知大学医学部准教授講師會共催）において「実践理性としてのケア——感情の職業と労働のはざままで——」として発表された原稿と、2011年1月30日に、第2回行為論研究會（科研プロジェクト「共同行為の責任と倫理に関する学際的研究」（代表：高千穂大学・木村正人））において「ケアリングにおける自己の問題——実践的合理性をめぐる試論——」として発表された原稿をもとに再構成したものである。

<sup>1</sup> この論争は、ギリガン (Gilligan) が女性の道徳観念が男性とは違った経過によって獲得されるのを指摘することから始まっている。

<sup>2</sup> 他者志向・自己志向という論点については、品川のノディングス論に由来する（品川：169以下）。

造概念」として語られている (Heidegger: 57)。さらに興味深いのは、こうした気づかいは、「道具的存在者」への気づかいとしての「配慮 (Besorgen)」と「他の現存在」への気づかいとしての「顧慮 (Fürsorgen)」とに区分されることである。他者とともに生きる「共存在」であるかぎりにおいて、現存在は道具を配慮するだけでなく、他者を顧慮している (Heidegger: 232)。たとえば、病気の人を看護することも、配慮ではなく顧慮とされる。そのうえでハイデガーは、顧慮の極端な可能性を二つ描き出してみせる。一方には、パターンリズムとでも言うべき顧慮があり、それは他者から気づかいを奪取して、他者がみずからすべき配慮を引き受ける。こうして他者は、依存する人、支配を受ける人となる。このときに顧慮が向かっているのは、他者そのものよりも、他者の気づかいが向かう道具であるという。他方には、他者から気づかいを奪取するのではなく、他者の気づかいを他者に返すような顧慮が成り立つ。こうした顧慮は、他者が配慮する道具ではなく、他者の実存 (他者が自分を気づかうこと) そのものにかかわるのであり、他者をその気づかいに向かって自由にする。

積極的な顧慮の二つの極 ― 尽力し支配する顧慮、および手本を示し解放する顧慮 ― のあいだに日常的な相互共存在は保たれており、多様な混合形式を産み出す (Heidegger: 122)。

ハイデガーは、他者を道具扱いしないような、パターンリズムに陥らないような、他者を自律させるようなケアを、ある種の顧慮のうちに見て取ろうとしている。このこと自体はきわめて興味深いことであろう。しかし、他者への顧慮は人間の本質でもケアの本質でもなく、ここからハイデガーのケア概念における他者志向の優位を導き出すことはできない。

世界内存在が本質上気づかいであるゆえにこそ、これまでの分析において、道具的存在者のもとでの存在が配慮として、世界内部的に出会われる他者の共現存在と共存在が顧慮としてとらえられた (Heidegger: 193)

現存在はあくまでも、まずは気づかいとして存在しており、それゆえにこそ、道具への配慮や他者への顧慮が成立している。したがって、現存在の存在論的構造とされる「気づかい」の内実が焦点となる。周知のように、気づかいとしての現存在の存在は「世界・内・存在」とも定式化され、「(内世界的に出会われる存在者)のもとに・存在する」(頹落) こととして、「(世界)のうちですでに存在する」(現事実性) ことにおいて、「みずからに・先立って・存在する」(実存) という三つの規定によって特徴づけられる (Heidegger: 192)。そのうえで、次のように言われている。

気づかひの第一次的契機である「みずからに先立って」が意味しているのは、何と云っても、現存在はそのつど自分自身という目的のために実存するということである (Heidegger: 236)。

現存在の存在としての気づかひは、みずからに先立つという仕方において、いわば自己の可能性へと方向づけられている。現存在がみずからに先立って存在する (実存する) のでなければ、身近な道具への配慮も他者への顧慮も成立しない。『存在と時間』が示している「他者へのケア」は、現存在が自分を気づかうことのなかで、しかもそれが他者と出会う共存在であるかぎりにおいて、他者を気づかうという構造になっている。

## 1. 2 メイヤロフ

ついで、ケアの哲学の先駆けとも言われるメイヤロフを見ていこう。メイヤロフは、ハイデガーのような人間の存在論を意図するわけではないが、ケアリングの本質論・原理論を形成している<sup>3</sup>。

まずは他者志向の契機を確認することから始めたい。ケアするものは、他者のなかに「価値」を感じ取り、「応答」するのであり、その応答の具体的なかたちは、相手が「成長」し、「自己実現」するのをたすけることにある。ケアというのは、他者に対して自己をゆだねるという「専心 (devotion)」を意味しており、「“そこに” その人のために私がいる」ことが、ケアリングにとって本質的なこととされる (Mayeroff : 8-9)。

一人の人格をケアすることとは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することをたすけることである (Mayeroff : 1)

このように、メイヤロフのケア概念は、他者の自己実現への志向という意味において、他者志向の契機をもっている。しかし、興味深いのは、「ケアリングにおける他者との一体性」は、「他者を支配したり、所有したりすること」ではなく、「他者とその固有の権利において成長し、“自分らしくなる”ことを助ける」ことに通じている (Mayeroff : 7)。ケアリングにおいては、自己と他者とは異なるものであり、他者を自己に同化したり、自己を他者に同化したりしてはならない。したがって、他者を「自分自身の延長」と感じ考えると同時に「独立したもの」と考えるのであり、そうしたなかで、他者の必要に応じて、専心的に応答する (Mayeroff : 5, 9)。このような徹底的な他者志向のゆえに、メイヤロフのケアリング理論は、看護学においても広く受け入れられている。

しかし、メイヤロフは、「ケアすることがどのようにして全人格的な意義を持つか、その人の人生にどのような秩序づけを行うか」 (Mayeroff : 2) という問いをたてており、ケアリングがケアするひとにとってもつ意味が中心問題になっている。しかも、そうした文脈においては、次のような指摘もなされている。

ケアとはケアする人にとって自己実現を意味する (Mayeroff : 32)

ケアリングのなかには、「ケアすることを中心として彼の他の諸価値と諸活動を位置づける働き」が見いだされる。したがって、ケアするひとは、その対象を起点として、世界やみずからの生活を中心化することになる。しかも、ケアリングが持続することによって、ケアするひとの生は安定性を獲得することになる。

彼のケアがあらゆるものと関連するがゆえに、その位置づけが総合的な意味を持つとき、彼の生涯には基本的な安定性が生まれる。すなわち、彼は……世界の中であって「自分の落ち着き場所にいる」のである (Mayeroff : 2)。

<sup>3</sup> メイヤロフは、「ハイデガーの分析に負うところはほとんどない」として、むしろデューイ、マルセル、フロム、バックラー、プーバーらの影響を強調している (Mayeroff : 邦訳213)。

<sup>4</sup> ケアリングが「感じ取り応答する能力」としての「価値への応答」であるということは、ローチも指摘している (Simone Roach : chap.3)。ここでは、フォン・ヒルデブラントの価値応答が念頭に置かれている。しかし、看護の文脈においては、「価値」というよりも「ニーズ」というべきかもしれない。

落ち着き場所にいるというのは、ケアリングをつうじて世界のうちに役割や生きがいを見いだしている状態である。この状態のときには、われわれは「心を安んじる」という意味での「了解性」(Mayeroff : 74-78)、自分の生き方に責任をもつ「自律」(Mayeroff : 78-83)、自分の能力への「信」(Mayeroff : 83-85)、自分の生を生きることへの「感謝」(Mayeroff : 85-87)などを手にすることになる。だからこそ、他の人々をケアすることは、「自身の生の真の意味を生きている」ことにも通じている (Mayeroff : 2)。

### 1. 3 ノディングス

ノディングスは、メイヤロフを継承しながらも、ケアするひとの意識状態をより詳細に記述し、ケアリングにおける他者の役割を強調している。そうしたことに留意しながら、ノディングスのケア概念を、ここでも他者志向と自己志向という観点から追っていくことにしたい。

ケアするひとの意識状態として、ノディングスは「すべてのケアリングには専心没頭 (engrossment) が含まれている」(Noddings : 17) としている<sup>5</sup>。メイヤロフの「専心」を踏まえながら、ノディングスもケアの中核に「自己からの脱却」(Noddings : 16) によって、対象に「専心没頭」することを見いだしている。さらに、ケアするひとは、他のひとそのものを自分にとってのひとつの可能性とみなすのであり (Noddings : 14)、そうすることで「ケアされるひとの方向に動機づけられる」(Noddings : 72) ようになる。他者の生の在り方が自分の未来の可能性になることは、「動機づけの転移」(Noddings : 33) と呼ばれており、これが本質的な契機を形成している<sup>6</sup>。

ノディングスの特徴は、ケアリングの意識状態に目を向けるのみならず、ケアするものとケアされるものとの関係性の指摘にある。

ケアされるひとがケアリングという態度を見て取ることがケアリングの一部を構成する (Noddings : 68)

ケアリングというのは、ケアするひととケアされるひとの関係を示しており、ケアされるひともケアリングの関係にとって重要な役割を果たしている。ケアされるひとは、ただケアされているわけではなく、ケアされることで「自分自身の方向性を変える」ようになる (Noddings : 75)。

ケアリングの関係というのは、ケアするひとの専心没頭や、動機の転移を要求し、ケアされるひとの認識や、自発的応答を要求する (Noddings : 78)。

ケアリングというのが自他の関係性を示す概念であって、ケアするものとされるものが対等である必要はないが、両者のあいだの相互性を欠くことはできない。ケアするものだけでなく、ケアされるものも応答を必要とする。

では、ケアリング関係において、自己はどのように働いているのであろうか。注目すべきは、ケアリングの関係がケアするひとの自己へのケアリングと結びつくという指摘である。

<sup>5</sup> 「汝と呼ぶことは——つまり、専心没頭することは——ケアするひとが、ケアリング関係のうちに存在するための必要条件だからである」(Noddings : 74) ともされている。

<sup>6</sup> こうした他者志向の特徴は、「他のひとに入り込む」のではなく、「他のひとを受け入れる」ことにある。ノディングスは受容性のニュアンスを強調している (Noddings : 31)。

他のひとたちをケアし、そうしたひとたちにケアされるとき、わたしは自分自身をケアできるようになる (Noddings : 49)

自己へのケアリングは、「倫理的自己へのケアリング」という表現によってより詳しく特徴づけられる。もともとケアリングは、母と子の愛情のように「ケアしたい」という「自然な感情」に根ざすものである(自然なケアリング)。しかし、そうした感情が生じないときでも、自己がどうあるべきかを考量することによって、「ケアしなくてはならない」というかたちの「倫理的ケアリング」が生じる。直接的には他者志向の欲求が生じない状況でも、自己の理想という自己志向と照合して間接的に、ケアリングが生じるようになる<sup>7</sup>。

倫理的自己に対するケアリングによって、わたしは、猜疑心と反感のなかでも、他のひとに対する奮闘に関与することができる (Noddings : 50)

したがって、ケアリングは、どのような自己になるべきかをめぐる自己形成にかかわる問題に通じていることが明らかになっている。

かかわりあいのなかで喜びを感じれば、倫理的理想という面での成長が促進される (Noddings : 132)

ケアリング関係は生きることに喜びをもたらし、「倫理的な理想の高まり」にも寄与している (Noddings : 147)。このように、ノディングスはケアリングを相互関係として理解し、そうした関係性のなかでの自己形成をきわめて重要な主題としていた。そこでは、他者はたんにケアリングが向かう対象であるだけでなく、ケアリング関係の重要な担い手とされたうえで、さらにはケアされる他者がケアするひとの自己形成に一定の役割を果たすことも指摘されていた。こうしたノディングスの理論の自己志向の契機を敷衍すれば、ケアリング関係というのは、他者によって支えられる自己形成ということになるだろう。

## 2. 職業的自己形成

ケアリングにおいては、われわれは身近な他者に価値を見だし、応答しているが、そのことがケアするひとに生きる意味を与えていた。ここでは、ケアの哲学が描き出しているこうした自己形成の意味について、さらに検討してみたい。

### 2. 1 職業的自己形成

ふたたびメイヤロフのケアリングの理論に立ち戻ろう。メイヤロフによれば、われわれがケアリングにたずさわるとき、われわれの活動やわれわれの活動がかかわる価値は、このケアリングを中心として序列化されるようになる。つまり、ケアリングが第一義的なものとなり、その他の活動や価値は第二義的なものとなっていく (Mayeroff : 51)。このことは、われわれがケアリングを中心にみずからの生を組み立て

<sup>7</sup> 品川哲彦はこれを、どのような欲求をもつかについての欲求として、フランクファートの概念を用いて「二階の欲求」と解釈している (品川 : 179)。テイラーの「強い評価」(Taylor) と関連づけることもできるだろう。

ることを意味している。しかも、ケアリングは「連続性」を前提としていて、「ケアの相手が、絶えず一人また一人と変わるようであれば、ケアは不可能である」(Mayeroff : 34) とも言われている。特定の対象を継続的にケアすることで、ケアは継続的な自己形成の源にもなっていく。

ケアはある中心となるものを設定するのであり、そのまわりに私の活動や経験というものが全人格的に統合されてくるのである (Mayeroff : 52)。

まさにこのようにして、ケアリングが当人の生きる意味を形成し、人格を統合しているのであって、ケアリングにおいて「私は自己の生の意味を発見し創造していく」(Mayeroff : 62) ともされている。こうした文脈においては、ケアするひとはケアされるものの「呼びかけにこたえる」という意味において、「使命 (コーリング)」を持っており、そうなることで、ケアすることが「ほかならぬ私独自の仕事」(Mayeroff : 63) とされるようになる。

こうしたメイヤロフの見解は、フッサールの倫理学が示すものと重なり合っている。フッサールは『改造』論文 (Husserl-2) や「生の価値、世界の価値」草稿 (Husserl-3) などの倫理学のテキストにおいて、人間の生き方について考察している。その場面で念頭に置かれるのは、ケアリング関係である。

わが子を愛情深くケアする母親のことを思い浮かべてみよう。彼女は知っているかもしれない。世界にはいかなる意味もない、あらゆる「価値」を無化する破滅が明日にも訪れる……ということ。……。だが、まともな母親ならば、そのときにこう言うだろう。そうかもしれないし、そんなことはよくわかっている。しかし、より確かなのは、わが子を破滅させるわけにはゆかない、子供は愛情をもってケアすべきということである (Husserl-3: 215)。

こうした母親は子供のうちに「絶対的な価値」(Husserl-3: 215) を見いだしており、子供へと愛を捧げることにおいて「『最も内的』で『最も純粋な』満足」を獲得するのであり、客観的な価値の有無とは関係なく、そのような愛に生きようとする (Husserl-2: 28)。このような絶対的価値によって人格の生が統一することは、「職業・天職 (Beruf)」という概念によって特徴づけられる (Husserl-2: 28)。母親にとっては子供への愛が、芸術家にとっては芸術への愛が「職業」であり、当の人格の生はそこに生きることに方向づけられ、「生をもっぱらそこに属する価値の実現に献身する」ようになる (Husserl-2: 28)。自分にとって価値あるものにみずからの生をささげることによって自己が形成されることは、「職業的自己形成」と呼ぶことができるだろう。フッサールとメイヤロフがともにケアリングにおける自己形成を「職業・天職・使命 (Beruf, vocation)」などと表現しているのは、きわめて興味深いことである。

## 2. 2 ケアリングの拘束力

注目すべきは、このような職業的な自己形成について、何人かの論者によってある種の非合理性が指摘されることである。ケアリングは自己の自由な決断によってなされるというよりも、そうせざるをえないものとして自己を拘束する。フッサールは、そうした拘束力をもつ感情を「天命 (Beruf) や内的な呼び声 (Ruf)」と特徴づけ、次のように述べている。

この絶対的情感性を経験する者にとって、これは合理的根拠のもとにおかれているわけではないし、

正当な結びつきで根拠づけに依存しているわけではない。この絶対的情感性は、合理的説明が可能である場合でさえ、あらゆる合理的説明に先だっている (Ms. B I 21, 65a: Husserl-1: XLVIII)。

つまり、通常の合理的な行為の選択は、複数の行為可能性の価値を比較考量して、そのなかからもっとも価値の高いものを選びとる。しかし、職業的自己形成はそうではない。子供を気づかう母親がそうであるように、あらゆる比較検討に先立って、その人の生そのものを形成する価値への方向性が、そうせざるをえないものとして生じている。

ノディングスもまた同様に、ケアリングのもっている道徳的観点は「どんな正当化の概念よりも先行している」ので、正当化を必要としないと考える (Noddings : 95)。なぜケアリングをするのかというケアリングそのものの方向性については、自然な感情に根ざす以外にはなく、根拠づけることはできない。子供へのケアリングにおいては、親が子供に熱中しているのであって、このケアリングは理由づけられるわけではなく、非合理的なものである。

このように、ケアの哲学においては、ケアリングに駆り立てられることがケアリングそのものの正当化になっていて、それ以外の正当化の源泉を求めることはできないとされる。

フランクファートは、ケアリングがケアする者を拘束する力について、より詳細に分析している。ケアリングにおいては、「わたしはそれ以外のことできない」という必然性が見いだされるが、これは論理的必然性でも、因果的必然性でもない。母親が子を気づかうときには、論理的にも物理的にも、子供を見捨てることはできる。にもかかわらず、母親が子供を愛す以外のことできないとすれば、母親は見捨てることを「意志」できないのである。ケアリングにおけるこうした必然性は、「意志の必然性 (volitional necessity)」と特徴づけられている。

意志の必然性に服している人は、自分がしているようにしなければならない (Frankfurt: 86-87)。

ケアリングにおいては、そうせざるをえないという拘束力が、行為や生き方を導くことになる。ケアリングの哲学的考察が共通して、ケアリングを行為の選択肢の合理的な比較考量が成り立たない場面に位置づけているのは、きわめて特筆すべきであろう。

### 3. 職業と労働のはざままで

このような職業的自己形成の可能性と限界を示すために、同じくケアリングを視野に納めながら、それを「労働」と見なす感情労働論を引き合いにだしてみたい。

#### 3. 1 感情労働としてのケアリング

ホックシールドの感情労働論を確認しておこう。「感情労働 (emotional labor)」が求められる職業においては、「対面あるいは声による顧客との接触」が不可欠であり、それらの従事者は「他人の中に何らかの感情変化——感謝の念や恐怖心等」を起こさなければならず、しかも「雇用者」が研修や管理体制を通じて「労働者の感情労働をある程度支配する」ことになる (Hochschild : 147)。

感情労働を伴う仕事では、他者と人間的な接触を持ち、相手のうちに感情の変化を起こさせ、その労

働について上司から監督を受けなければならない (Hochschild : 156)。

以上のような特徴を持つ感情労働においては、労働者と顧客のあいだで感情が交換され、さらには労働者自身や雇用者によって感情の管理が行われる。このような感情をめぐる洞察は、心の内面のプライベートなものを見なされがちな感情に対して、その社会性・公共性・管理可能性を指摘する点、感情の商品化を踏まえた新たなタイプの労働概念を発見した点などにおいて、きわめて大きなインパクトがあった。とはいえ、ホックシールドの感情労働論の射程が、そのような感情と結びつく「自己」にまで及ぶことを忘れてはならない<sup>8</sup>。感情労働においては、その従事者がたびかさなる感情管理のなかで「自己の源泉」をも疲弊させることが危惧されている (Hochschild : 7)。その最たるものが「燃え尽き」と呼ばれる現象である。つまり、労働者は顧客と管理者とのはざまにあって、「あまりにも一心不乱に仕事に献身し、そのために燃え尽きてしまう危険性」が考えられる。自己の感情を商品化することで自己の疎外が生じるという指摘は、ケアリングにおける自己の問題を考えるうえで傾聴に値する。しかも、ホックシールドはここで、どのようにすれば「自己の要素が役割に流れ込む」のを許しつつ、「役割が自己にもたらすストレスを最小限に抑え」ながら、「自己を役割に適応させる」ことができるのかという問いに答えようとしている (Hochschild : 188)。

演技をしている自分と演技をしていない自分との区別をすることによって、燃え尽きることへの耐性は強まる (Hochschild : 188)

顧客に何らかの感情をつくりだす役割を負った労働者は、「表層演技 (surface acting)」と「深層演技 (deep acting)」という二つの演技をつかって、自己をとりつくろい、防御することになる。ホックシールドは、演技している自己 (以下、演技的自己) と演技していない自己 (以下、本来的自己) とを区別することが燃え尽きを避ける手段となると考えた。実際に、二つの自己を区別したうえで、演技的自己に感情管理を課し、そのスキルを向上させることは、本来的自己を守る有効な手立てである。こうしたことから、感情労働論は看護ケアなどの場面にもとり入れられ、大きな成果をあげている (Smith, 武井1, 武井2)。ホックシールドはしばしば感情労働を演劇の比喩を用いて説明している (Hochschild : 48-55)。感情労働者は「役者」であり、雇用者は「舞台監督」であり、職場は「舞台」であり、そこにはさまざまな「小道具」が配置されている。ケアリングが演技であるかぎり、役者は舞台をおりることもでき、本来的自己を感情規則から自由にしておくことができる。そのため、ケアワークにおけるケアリングには、演劇性が求められることになる<sup>9</sup>。

### 3. 2 職業的自己形成の問題点

ふたたびケアの哲学に立ち戻ることにしてしよう。感情労働論は、ケアリングを「労働」と位置づけることで自己疎外論を展開しているのに対して、ケアの哲学者たちは、ケアリングのなかに「職業・天職」というニュアンスを読みとって、自己形成論を展開していた。ここでは、ケアする自己は労働において搾取されるものなのか、職業において充足するものなのかという問いを立てても意味がない。というのも、それ

<sup>8</sup> 崎山は、自己というトピックから感情労働論に理論的検討を加えている (崎山)。

<sup>9</sup> ホックシールドはこのような演劇性の必要性を示すと同時に、このような演劇性がいつのまにか自覚されなくなることの危険性を訴えている (Hochschild : 48)。

ぞれがケアリングに対して独特のアプローチを行い、その独自の側面を際立たせているからである。労働も職業も、広義でのケアリング現象のある側面を特徴づける概念として有効であろう。大切なのは、それぞれのアプローチのなかにどのような問題（や可能性）が含まれているのかを探ることである。

いまや明らかなことだが、ケアの哲学が自己と役割を区別することなく、演技的自己の役割を考慮しないとすれば、感情労働が指摘する「燃え尽き」の危険にたいして無頓着ということになるだろう。そのとき哲学的アプローチは、ケアリングについての原理的探求を自称しながらも、具体的なケアワークの理論としていちじるしく妥当性を欠くことになる。演技的自己と本来的自己の区別がないケアリングは、その終焉や失敗がそのまま自己形成の終焉や失敗を意味するだろう。だからこそホックシールドは、ケアする自己を基本的に役割（演技的自己）の次元に位置づけることで、本来的自己の疎外や疲弊を回避する方策をもとめている。役割という発想は、ケアリングからの撤退や役割の交換の必要性を示唆するものである。こうしたことを踏まえるならば、撤退や交換が機能しているときにこそ、健全なケアリングが実現されることになる。

これに対して、「天職」という意味での職業は、現実のケアワークを念頭においた語りとしては、あまりにも素朴な記述にとどまっている（Kuhse：142-166）。つまり、「愛の労働」とも言われる現実のケアワークが、ジェンダー・階級・地位などが交差する生々しい力学の場であることは言うまでもない。そうしたことを括弧に入れて、ケアリングが天職と結びつくという主張は、あまりにも不用意と言わざるを得ない。職業的自己形成という発想は、特定の性や階級や地位などの人たちにケアリングの役割を強制的にあてがうことを正当化する危険性をはらんでいる<sup>10</sup>。

### 3. 3 自己の固有性

しかし、本来的自己と演技的自己という二つの自己が機能することを認めただうえで、両者の距離を保つスキルを磨くことで、あらゆる問題がなくなるわけではない。というのも、ケアワークの現場において、二つの自己の区分がなりたない場面、あるいは本来的自己までもが引き裂かれる場面が指摘されるからである。

ケアリングの「引き際」について考えてみよう。感情労働論の文脈においては、引き際というのは、これまでケアしていた演技的自己が役割をおえることを意味するだろう。たとえば、ケアされるものの死によってケアリングが中断されたとき、そこで演技的自己が役割を終えることで、ケアリングの関係が解消されているはずである。しかし、事態はそれほど単純ではなく、ときには「中断後も配慮や気づかいが続いていく」とことがあるという。ケアリングから撤退したあとになお、ケアしていた相手のことを考え続けるような「しないというケアをしている」状態が指摘される（鳥海・森口：36）。この場合には、演技的自己が役割をおえたあとにも、本来的自己のうちでケアリングが引き継がれている。しかも、演技的自己を超えて本来的自己にまで、感情の変容がしいられることもある。そのため、〈引き際〉においては、ケアするひとはときに「実存的な葛藤状態」におかれ、「存在の裂け目から振れだされる〈わたし〉の感情」をおさえられなくなるという（鳥海・森口：27）。ハイデガーは『存在と時間』において、いみじくも、

<sup>10</sup> このほかにも、次のような問題が考えられる。「意志の必然性」については、たしかにわれわれの行為の選択のなかに、そういった類のものがある。しかし、現実のケアワークのなかで意志の必然性がつねに働くことは考えられない。意志の上ではケアしたくないが、仕事という役割ゆえにケアすることは、稀ではないだろう。

「非合理性」についても、限定された用法が必要である。実際のケアワークにおいては、そのケアリングがよいものなのかどうか問われるのであって、その問いを封じてしまえば、ケアリングを独善的なものにしてしまうだろう。また、合理性の問いを受け付けないのであれば、ケアリングがとにかく成立すればいいものとされてしまう。

ケアしないというケアの欠如態がある種のケアリングであると述べていた (Heidegger: 121)。まさに、このような洞察は、ケアリングが人間の生そのものと不可分の次元にかかわるために、それを演技的自己の役割には解消できないことを示している。

また、看護ケアなどにおいては、看護に従事する者が患者と向かい合うなかで、自己の問い直しを促されることもある。患者によってみずからのケアリングを根本から否定されたり、さまざまな患者に出会ったりすることは、ケアするひとの自己そのものに変容をせまる。

患者の強い「思い」を前にしたとき、看護職はときに、自身の職業的キャリアを振り返ったり、自身の個人的な価値観や生活史を改めて発見したりする (三井: 23)。

三井は、こうした場面を「看護職の固有性」という言葉で特徴づけて、看護職はその職務ゆえに、自身の固有性に繰り返し直面すると指摘している (三井: 23)。ケアワークの現場においては、演技的自己を確立し感情管理のスキルを磨いても、なお解決されない問題が存在している。ケアリングはケアするものの生き方に結びつくものであり、演技や役割という暫定的な関係性に還元することはできない。だからこそ、ベナーが主張するように、ケアワークにおける「気づかいの第一次性」を踏まえたくて、ストレスなどの問題に対処するという方法は、有効でありつづける (Benner & Wrubel)。このような文脈のなかでこそ、ケアの哲学の自己形成論は活かされるだろう。

### むすび ― 変容する自己

ケアの哲学が描き出している職業的自己形成の可能性と限界が明らかになったいまや、若干の指摘をすることでむすびとしたい。

ノディングスの自己形成論が指摘していたように、ケアリング関係にはケアされるひとが大きな役割を果たしている (Noddings : 49, 147)。ケアするひとはケアされるひとからケアされることで、「ケアの仕事に〈わたし〉が繋がれる」という思いを抱くことができる (鳥海・森口: 41)。ケアする自己はケアされる相手や同僚などによってケアされることがあり、そのことによっていっそうケアの仕事に生きがいを見いだすようになる。しかも、この自己は、患者や同僚から強い影響を受けて、しばしば価値観や人生観をめぐる根底的な変容をこうむる。ケアリングによる自己形成をなおも職業と呼ぶことができるとすれば、それは「自己変容を中核とする職業観」(鳥海・森口: 40) に根ざしていなければならないだろう。ケアリングにおける自己形成は、他者に開かれていて、変容しうるものでなければならない。

とはいえ、こうした自己形成は、決して、場当たりのなもの、非合理的なものではない。この自己形成は原理原則への準拠とは別の合理性をもつことを、ケアの哲学は示している。フッサールは、自己がこのような変容に開かれていることを、「革新 (Erneuerung)」という概念によって表現している。こうした変容においては、新しい信念や価値観が明証的になることで、これまでの認識や行為が通用しないことがわかる。そうした新しい信念や価値観にしても、そのつどの妥当を見いだすだけであり、新たなものによる変更の可能性を否定できない。ケアするひとの生き方を支える信念や価値観にはそのような変更の可能性が含まれている。しかし、この変容の可能性は、何ら否定的意味をもっていない。ケアリングにおいてはむしろ、変容の可能性に開かれていることが理性的な営みとなる。ケアリングにおける自己形成が合理性をもつとするならば、革新という合理性になるであろう。フッサールは『改造』論文において、革新の生を「倫理的」とも形容して、「実践理性」に基づく生き方と特徴づけている (Husserl-2: 42)。われわれの職

業というのは何の合理性もなく引き受けられることがある。どのようなものに価値を見いだすかは相対的であるだろうし、そうした価値の選択の自由が保証されない状況が考えられる。フッサールはそうしたことを踏まえたうえで、職業を支えている信念を批判的に吟味し、ときには自己を変容させる可能性に対して開かれていることのうちに、自己形成の合理性を見いだしている。

## 文 献

- 崎山：崎山治男、『「心の時代」と自己——感情社会学の視座』、勁草書房、2005年。
- 品川：品川哲彦、『正義と境を接するもの責任という原理とケアの倫理』、ナカニシヤ出版、2007年。
- 武井1：武井麻子、『感情と看護——人とのかかわりあいを職業とすること』、医学書院、2001年。
- 武井2：武井麻子、『ひと相手の仕事はなぜ疲れるのか——感情労働の時代』、大和書房、2006年。
- 鳥海・森口：鳥海直美・森口弘美、『〈引き際〉の感情 相談援助の仕事に携わる熟練者のインタビューから』、『ケアする仕事をする人のケア 感情労働の視点から』、財団法人たんぼぼの家、2009年。
- 三井：三井さよ、『看護職における感情労働』、『【特集】感情労働論(2)——スキルとしての感情管理』、大原社会問題研究所雑誌、No567、2006年。
- Benner & Wrubel: Patricia Benner and Judith Wrubel, *The Primacy of Caring: Stress and Coping in Health and Illness*, Addison-Wesley, 1989. (パトリシア・ベナー/ジュディス・ルーベル、『現象学的人間論と看護』、難波卓志訳、医学書院、1999年)
- Frankfurt: Harry G. Frankfurt, *The Importance of What We Care About*, Cambridge University Press, 1997.
- Gilligan: Carol Gilligan, *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*, Harvard University Press, 1982. (キャロル・ギリガン『もうひとつの声 男女の道德観のちがいと女性のアイデンティティ』、岩男寿美子監訳、川島書店、1986年)
- Heidegger: Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 17. Aufl. Max Niemeyer, 1993.
- Hochschild: Arlie Russell Hochschild, *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, University of California Press, 1983. (A. R. ホックシールド、『管理される心 感情が商品になるとき』、石川 准・室伏垂希訳、世界思想社、2000年)
- Husserl-1: Husserliana: Edmund Husserl *Gesammelte Werke Band Band XXVIII: Vorlesungen über Ethik und Wertlehre (1908-1914)*, 1988.
- Husserl-2: Husserliana: Edmund Husserl *Gesammelte Werke Band XXVII: Aufsätze und Vorträge (1922-1937)*, 1989.
- Husserl-3: Edmund Husserl, "Wert des Lebens. Wert der Welt. Sittlichkeit (Tugend) und Glückseligkeit <Februar 1923>," *Husserl Studies* 13, 1997. SS.201-235.
- Kuhse : Helga Kuhse, *Caring: Nurses, Women and Ethics*, Blackwell, 1997. (ヘルガ・クーゼ、『ケアリング 看護婦・女性・倫理』、竹内 徹・村上弥生監訳、メデイカ出版、2000年)
- Mayeroff : Milton Mayeroff, *On Caring*, Harper Collins, 1972. (ミルトン・メイヤロフ『ケアの本質 生きることの意味』、田村 亮、向野宣之訳、ゆみる出版、1987年)
- Noddings : Nel Noddings, *Caring - A Feminine Approach to Ethics & Moral Education*, University of California Press. 1984. (ネル・ノディングス『ケアリング——倫理と道德の教育 女性の観点から』、立山善康他訳、晃洋書房、1997年)
- Simone Roach: M. Simone Roach, *The Human Act of Caring: A Blueprint for the Health Professions*, The

Canadian Hospital Association, 1992. (シスター・M・シモーン・ローチ、『アクト・オブ・ケアリング ケアする存在としての人間』、鈴木智之・操 華子・森岡 崇訳、ゆみる出版、1996年)

Smith:Pam Smith, *The Emotional Labour of Nursing : Its Impact on Interpersonal Relations, Management and the Educational Environment in Nursing*, Macmillan, 1992. (パム・スミス、『感情労働としての看護』、武井麻子・前田泰樹監訳、ゆみる出版、2000年)

Taylor: Charles Taylor, "What is Human Agency ?," in his *Philosophical Papers 1: Human Agency and Language*, Cambridge, 1985, pp.16-44.